

資料館だより

企画・編集 国立ハンセン病資料館

発行 公益財団法人
日本科学技術振興財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電話 042-396-2909

FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>

ハンセン病資料館創立20周年 改めてその恒久性を願う

館長 成田 稔

一九九三年に創立した「高松宮記念ハンセン病資料館」は、「国立ハンセン病資料館」へのリニューアルを経て、ここに早くも20周年を迎えました。「国立ハンセン病資料館」（以下「資料館」）の設立根拠は、「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」（二〇〇八年公布）の第四章「名誉の回復及び死没者の追悼」第一八条「国立のハンセン病資料館の設置、…」の条文によりますが、その目的は「ハンセン病の患者であつた者等の名誉の回復を図るため」と明示されています。その遵守の証として、ハンセン病の過去（隔離施設の強行）と現在（化学療法の普及と治効）についての啓発用リーフレットやパンフレットなどが、一つの疾患としては他に類を見ないほど各方面に大量に配布されています。しかし、ハンセン病を患った方々の名誉回復の現状は、予想を大きく裏切っており、その主な理由が、日本固有の家（イエ）と世間の絡みにあるのは確かです。

ではどうして、それが置き放せないのでしょうか。理由は、この『資料館だより』の前号（第78号、二〇一三年一月）に寄稿しておき



開館20周年を迎える母娘遍路像

「らい（ハンセン病）だよ」となります。この会話の場の雰囲気、うとましき、さげすみ、そういった突き放すような思いやりのなさを感じませんか。これと同じような会話の対象になりがちなのが、精神、知的、身体障害者などの、立場の弱い気の毒な方々だとはいえます。

過去（らい）の日本の頼（らい）対策の根源的な誤りは、前のような会話に込められた感情に流され、この世から離される苦しみや悲しみを、患者が当然負うべきでもあるのかのように見過ごしていたことです。「この過ちを繰り返さない」とはよく聞きますが、様々な障害者施設において、人をないがしろにする現状も耳にします。

こうした状況を簡単に変えることは難しいでしょう。だからこそ、人を人として遇さないことの不当性と、それがいかに残酷なことを呼び起こすかを、「資料館」は論議の場として伝え続けねばならないと考えます。

そこにこそ、「資料館」は永遠にという願いを重ねたいものです。

続いて疾病対策課長補佐より厚生労働省の取り組み状況および連絡事項の説明と質疑が行われた後、各都道府県の取り組み状況の報告が、福岡県、宮崎県の担当者より行われた。パンフレット作成や講演会・写真パネル展の開催、ふるさと里帰り事業など、両県とも熱心に事業に取り組んでいる様子が見えたと。当館にも貸出用写真パネルやDVDがあるので、今後も各県での啓発活動の際に積極的にご利用いただければと思う。

38都府県担当官出席
ハンセン病問題
対策促進会議

厚生労働省健康局疾病対策課主催の平成24年度「ハンセン病問題対策促進会議」が、3月12日、国立ハンセン病資料館映像ホールにて開催された。

全国38都府県からハンセン病の担当官等が出席した。

始めに疾病対策課長補佐より、本会議の趣旨説明があつた後、全療協の神美知宏会長による約1時間わたる講演会が行われた。神会長は、ハンセン病問題の現状について、年々高まる高齢化と入所者数の減少を踏まえた上で、療養所での将来構想に向けた取り組みを紹介した。また、無らい県運動を推し進めた各県の責任にも触れ、再発防止のための啓発活動等の取り組みに今後も力を入れて行つて欲しいと訴えた。

春季企画展・一遍聖絵と 極楽寺絵図にみるハンセン病患者

当館では来る5月11日(土)より、春季企画展「一遍聖絵・極楽寺絵図にみるハンセン病患者」中世前期の患者への眼差しと処遇」を開催します。

ご存知のように、ハンセン病と日本人との関わりは古く、『日本書記』に「白癩」の記述をみることが出来ます。古代から近世までのハンセン病への認識は、感染する病、仏罰による病、けがれた病、家筋・血筋が原因というように

変化し、なおかつ重なりあい、その中で患者たちは、罪深い者、業を負った者として社会の底辺におかれてきました。なぜこの病気を患った人が、ひどい差別を受けるようになったのか、日本人の本音に潜む「差別」意識の源について知るために、前近代に関する調査研究も継続しなければならぬでしょう。

しかし、近代日本が国策としての「癩」対策を始める以前は、ハンセン病患者が歴史の表層に現れることは稀で、史資料も断片的、各時代の差別・偏見の実相を窺い知ることはなかなか困難です。

そのような乏しい史資料の残存状況にあつて、中世前期(鎌倉時代)には、ほぼ同時代を生きた一遍・忍性に関連する事跡に、当時「非人」と称された被差別民の中にハンセン病と目される人々(「癩者」)の姿が垣間見られます。

そこで本展覧会では、中世前期の人々のハンセン病患者への眼差し、そして患者の社会のなかでの処遇について、一遍聖絵(縁起絵を含む)と鎌倉の極楽寺絵図を観ることによって、差別の実相を窺う手がかりを見いだそうと思います。

一遍聖絵には、主人公の周辺に様々な階層の人が描かれています。中世民衆の息吹を感じられる貴重な資料ですが、そこにハンセン病患者と思しき人々もごく自然に描かれています。

また差別されていたはずの人々を排除せず作品に描きこんだ絵師の眼差しにも注視すべきでしょう。果たしてそこに差別意識が宿っていたのでしょうか。絵師の立ち位置から私たちは改めて聖絵を鑑賞する必要がありますように思うのです。

一方、極楽寺絵図は近世に成立した資料です。忍性のハンセン病患者への救済事蹟については「元亨釈書」(性公大徳譜)などの古記録に記されているのみです。しかしながら中世の極楽寺の盛況ぶりは、旧伽藍跡地から出土する大量の中世前期の考古遺物(一部を展示します)の出土によって充分に裏付けがとれます。

「癩宿」「施薬院」「療病院」「薬

『一遍上人縁起絵』巻3-1 尾張甚目寺(清浄光寺(遊行寺)蔵)



湯院」等の施設が描かれた極楽寺絵図ですが、救済事業は、施す側にとつて、施される側にとつて如何なるものだったのでしょうか。絵図をじっくり観察し、中世と近代以降の違いについて様々に想像してみてはいかがでしょうか。

ご来館をお待ちしております。

歴史的建造物保存等検討会 長島、多磨、沖縄三園が説明

2月15日(金)に、厚生労働省健康局長主催の第2回歴史的建造物の保存等検討会(於厚生労働省専用17会議室)が開催された。

本検討会は、ハンセン病問題対策協議会での統一交渉団からの要望をうけ、ハンセン病資料館運営企画検討会の下に平成20年12月に設置されていた歴史建造物等保存検討作業部会を廃止し、新しく組織された。ハンセン病問題基本法第18条等をふまえ、ハンセン病及びハンセン病対策の歴史に関する正しい知識の普及啓発等に資するための歴史建造物の保存に関する基本的な考え方、諸調査の実施、保存活用に必要な基本的計画等、国の考え方や実施すべき事柄をまとめる場になっている。

昨年9月の第1回検討会で事務局は、旧作業部会が行った歴史的建造物調査結果を提示、検討会設置の経緯を説明、今後の会議の進め方についての叩き台を提出した。その後の参集者の議論では、歴史的建造物の保存等に関する基本的な考え方をまとめるために入所者の考えを充分に尊重する必要があることを確認し、各療養所の入所者を代表する自治会長を招いてヒアリングを行うことを決定した。

多磨全生園の佐川自治会長、沖縄愛楽園の金城自治会長が招かれた。各会長は、園の将来構想の策定経緯と内容を説明しながら、地図・写真・整備計画図などを駆使し、歴史的建造物等の現状、保存活用計画の概要、計画実現に必要な展示収蔵施設や専門職員の派遣・増員の必要性等に言及した。

なお各会長の説明前に旧作業部会の歴史的建造物調査に携わった藤岡参集者により、建築史学からみた各園歴史建造物・史跡の評価コメントが添えられた。じつは建築史の視座から保存価値があると評価される歴史的建造物は極めて限られた数になる。しかしながらハンセン病療養所の歴史的建造物・史跡については、建築史の尺度だけでなく、基本法の精神に則り、ハンセン病問題に関する正しい知識の普及啓発等に資するための「記憶の場」として保存・活用されなければならない。各会長の説明にもそうした願いが溢れていたし、参集者の意見も、この観点を重視することで一致している。おそらく、この共通認識が検討会でヒアリングを重ねていくことによつてより一層明確になり、歴史的建造物の保存等に関する基本的な考え方をまとめるうえでの共通の足場を形成するに違いない。

開館20周年をふり振り返り 式典、写真展講演会等を

当館では本年6月25日に開館20周年を迎えるにあたり、各種記念事業を開催する。式典を皮切りに、6月下旬からの約一ヶ月間に、記念展や記念誌の刊行などを行う。20年間の足跡をふりかえり、何の目的で資料館が設立されこれまでに活動してきたのか、その「初心」を再確認する期間としたい。またそこから今後向かうべき方向性をも見定めたい。以下、予定しているいくつかの事業を紹介する。

記念展 6月25日(火)から7月28日(日)まで、一階ギャラリで20周年記念展示「ハンセン病資料館の20年」(仮)を開催する。

展示する資料は写真が中心になる。建設資金難を打開するため西武新宿線久米川駅前で通行人に対して呼びかけた募金活動や、多磨全生園入所者自治会の方々が笑顔で見守る中建設予定地で行った安全祈願祭の写真などからは、入所者らが高松宮記念ハンセン病資料館設立に力を注いだ当時の様子を知ることができる。

また開館間もない頃の語り部活動の写真とごく最近の語り部活動の写真とを見比べると、変わることなく啓発活動に努め続けてきた20年という時間の重さを実感させられる。

他にも一九九三年の開館記念式典、旧常設展示室、語り部活動や展示案内の様子、企画展等催事、リニューアルオープン式典、収蔵庫、語り部活動、企画展、催事、施設貸出の様子などの写真で、設立準備から今日までをふりかえる。

他にも館外に講演を依頼する記念講演会や、入所者らに設立当時の思い出や将来の資料館に期待することなどを語っていただく座談会の開催も予定している。約一ヶ月間に及ぶ各種記念事業を通じてはじめて来館される方々には当館が博物館施設として持っている社会的な価値を認識してもらえ、以前から当館を知る方々には思いを新たに思ってもらえればと思う。



安全祈願祭(修祓式)

数々の功績を偲び多磨自治会が大谷藤郎元館長の胸像建立を!

国立ハンセン病資料館は6月25日に開館20周年を迎えます。この日を中心に講演会、ギャラリ展など色々な記念行事が計画されておりますが、全生園入所者自治会はこの日に併せて、大谷藤郎元館長の胸像建立を計画し、呼びかけたところ78人より185万3千円の寄附金がありました。(この中には全療協本部、栗生自治会、駿河自治会からの分も含まれております)



「大谷見解」を発表する大谷先生

一九七二(昭和47)年、大谷先生が国立療養所課長になってから全療協や多磨自治会との長い交際が始まりました。当時雑居生活だった不自由者棟と独身舎の個室化や整備の改善に尽力、医務局長を務め、退官後は国際医療福祉大

学学長などを歴任しました。藤楓協会理事長として高松宮記念ハンセン病資料館を建設、国民のハンセン病に対する関心や注目が徐々に深まってきました。また一九九六(平成8)年にはらい予防法見直し検討委員会(大谷座長)が作成した「らい予防法廃止法」が施行されました。

国賠訴訟熊本地裁では原告側、被告側双方の証人として立ち、国の人権侵害の誤ったハンセン病施策を明確に証言しました。

二〇〇一(平成13)年に熊本判決確定、二〇〇九年に「ハンセン病問題基本法」が施行され、日本のハンセン病事情は大転換、そのきっかけをつくったのが大谷先生だと思っています。恩師小笠原登先生を尊敬し、松本馨さんと親交を重ねていました。

資料館だより復刻版と20周年記念誌を発行!

6月の開館20周年に併せて、『20周年記念誌』と『資料館だより復刻版』の発行を予定している。

『記念誌』は一九九三年からの20年にわたる活動の記録とし、年表的な要素と諸々のデータをおさめる予定。加えて開館20周年記念展の図録にあたるページも設ける。

二〇〇四年発行の『高松宮記念ハンセン病資料館10周年記念誌』は、リニューアルを前に、それまでの10年間の活動記録と当事者の

手による展示図録を作る目的で編集した。今年発行の『20周年記念誌』は、設立からの資料館の意義と活動を、当事者が減少している現状と今も残り続ける問題を踏まえて、いかに受け継ぐかを考える際の引きの1つとなればと考えている。

その意味もあつて『10周年記念誌』には含めなかった、一九九〇年にはじまる資料館設立までの動向も含めて記載する予定である。

『資料館だより』は、創立年の

一〇月より季刊で20年間発行されつづけてきた。『復刻版』には創刊号から二〇一三年四月号(No.79)までの復刻と、同じく創刊号からの記事目録を収録する。

『資料館だより』は館活動の広報はもちろんのこと、「らい予防法」廃止、国家賠償請求訴訟、その後の動向等も情報発信してきた。その意味では資料館だけでなく、ハンセン病をめぐる状況の変化をも理解しうる内容であると共に、改めて創刊号から読むことで多くの学びを得られる貴重な資料でもある。地道に続けてこられた重みと願いを多くの方に伝えたい。

曾我野一美さん追悼集会 各界から200人別れを惜む

1月31日、永田町の星陵会館で曾我野一美さんの追悼集会が開催された。曾我野さんは昨年11月23日に亡くなられ、大島青松園で既に告別式が行われたが、今回追悼の会が改めて東京で持たれた。会場には全療協、原告団、弁護士、議員懇談会をはじめ生前親交のあった方々約二百人が集まった。

運動家という言葉葉がぴたりとあてはまる方だった。一九五三年のらい予防法闘争で参議院裏での座り込みに参加したのをはじめ、大島青松園自治会を支援し続け、一九九一年のらい予防法改正要請書提出時には全患協会長、国賠訴訟では原告団会長、その後再び全療協会長を務めるなど、常に運動の第一線で活躍してこられた。その鷹揚な人柄は全国の人から慕われ、頼りにされる存在だった。

当館もお世話になった。リニューアルオープン準備では、ご自分の半生をカメラの前で語っていただいた。運動こそが自分の人生といったお話で、今も展示室で来館者にご覧いただいている。

この時間き手だった筆者が、運動とは別に個人としての喜びについてしつこく尋ね過ぎたため、曾我野さんを怒らせてしまい撮影が打ち切りになりかけた。その夜園内の食堂で偶然会ったので、性懲りもなくまた同じことを尋ねてみた。故郷に帰るとき、わざと隣のホテルに泊まるのだが、自分が帰ってきたことを聞きつけた幼なじみたちがホテルまで訪ねてきてくれたのはうれしかったと、「れんと」の一升瓶を片手に今度は話してくれたのを覚えている。

集会中の追悼の言葉や、散会后に聞いた思い出話から、曾我野さんのスケールの大きさを感じた。ご冥福をお祈りしたい。



この時間き手だった筆者が、運動とは別に個人としての喜びについてしつこく尋ね過ぎたため、曾我野さんを怒らせてしまい撮影が打ち切りになりかけた。その夜園内の食堂で偶然会ったので、性懲りもなくまた同じことを尋ねてみた。故郷に帰るとき、わざと隣のホテルに泊まるのだが、自分が帰ってきたことを聞きつけた幼なじみたちがホテルまで訪ねてきてくれたのはうれしかったと、「れんと」の一升瓶を片手に今度は話してくれたのを覚えている。

集会中の追悼の言葉や、散会后に聞いた思い出話から、曾我野さんのスケールの大きさを感じた。ご冥福をお祈りしたい。

○ハンセン病についてよくわかりました。全生園全体も回ってみると、おもしろかったです。春休みまた来ます！（小学生 女 11歳）

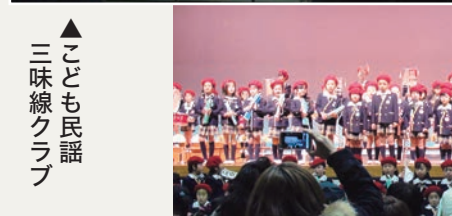
○正しい病気に對する理解と偏見をなくすることが大切だと思います。悲しい歴史的背景で本当に見ていて辛かったです。今日見学させて頂いた事は忘れないと思います。ありがとうございます。（看護師 女 44歳）

○65年全生園で過ごされた平沢さんのビデオを見ました。断種手術、

第3回「ぎやがコンサート」 楽器、合唱、民謡を熱演

NPO法人東村山生き生きまちづくりと全生園入所者自治会共催で、1月26日（土）午後2時、コミュニティセンターで今年も第3回にぎやがコンサートが開催されました。出演は東村山市立第6中学校吹奏楽部・花みずきなど4曲、市立青葉小学校・明日を信じてなど3曲、東村山こども民謡・三味線クラブ・津軽じょんがら節など5曲、市立第5中学校・合唱どこかで春がなど5曲、麻の実幼

稚園鼓笛隊・栄光の架橋、花さき保育園は風邪のため中止でしたが、いずれも見事な演奏、合唱で入所者、職員、保護者、家族など、満場の観客を感動させました。公演は病棟にも中継、NPOの方は会場案内もしてくれました。



麻の実幼稚園（130人）

▲こども民謡
三味線クラブ

来館者の声

○同じ日本の中で病による差別を受け隔離されている人達が居たというところにショックを受けました。それと同時に療養所の中で患者達は皆生きる意味、自分の存在を前向きに考えていたことに感動しました。花さき保育園を通して子どもが療養所の皆様と触れ合っている

○死んでも許すことができないと話されていて、このような過去は風化させてはいけないと思いました。療養所に入ったら一生出られない、そのような不幸があつて良いのでしょうか。多くの人にこの病や資料館のことを知ってもらいたいと思いました。（学生 女 21歳）

○人権の大切さを学んだ。私たちが同苦し、行動に移さなければならぬ。友人に語り伝えたい。（主婦 女 72歳）

○知らないことがたくさんあつて驚いた。言葉であらわしきれない。これから活かしたい。（看護学生 女 16歳）